

奥村 正雄

二つの弔い

その一

■ 山懐の通夜

福地正博さん（享年72歳）の訃報を聞いたのは、昨年暮れも押しつまった12月30日である。電話で知らせてくれた劉玉琴夫人（71歳）の声は驚くほど冷静だった。逝去は28日。肺がんで入退院を繰り返していたので、夫の死はすでに彼女の胸の中で、数え切れないほど覚悟を迫られていたせいかとも思ったほどである。

「通夜を1月4日6時から、告別式を5日10時から、市川市の霊園で行いますので…」夫とともに来日して10年、中国語と日本語が相なかばする訃報だった。新年になって帰国者のZさんから連絡があった。通夜の会場がわからないから一緒に行きたいという申し入れだった。彼は今、千葉市に住んでいるが、以前、故人と同じ市川市国府台の県営住宅に住んでいて福地さんと親しかったのである。

4日、JR本八幡駅で待つとZさん夫妻とZ夫人の弟夫妻の4人が見えた。駅前からバスで終点の県立北高校前で降りた。そこはすでに町外れでまわりに家はない。そこからさらに霊園まで、暗い夜道の徒歩15分で心が凍えた。公道は工事中で迷路のような狭い道がどこまでも続く。夜目にも霊園とおぼしき林の丘にぶつかった。そこから山裾を迂回しながら漆黒の路をさらに6、7分。会堂の灯りが見えたときはほっとした。

集まった弔問者が40人ばかり。

「ハルピンの娘は、瀋陽の領事館が正月休みにはいってビザがとれなかったのです」と夫人。夫妻には長男と双子の姉妹がいる。姉妹の妹がハルピンの黒龍江大学教授夫人として、ひとり胸が張り裂ける思いで領事館の業務再開を待っているのだろう。

通夜は質素に、会場の女性が進める型通りの進行を、長男が勤めるI社の通訳が中国語に訳して進められた。一輪の花を霊前に捧げ、棺の窓から遺体に合掌する。眠っているような安らかな死に顔は、血色さえ元気な頃を髣髴させる生気が漂う。

■ 雪の日の病床で

私は思わず1年前の、雪の日の情景を思い出していた。春先なのに雪になって、JR西船橋駅から病院へ向かって歩いた私は、病院の玄関でしばらく雨靴の中に入った雪と、濡れた衣服を始末してから5階の病室へ向かった。4人部屋に患者2人、福地さんは眠っていた。私は彼の枕もとのスツールに腰をかけ、彼が眼を覚ますのを待った。5分ほどして

眼を開いた。が、私を認めても表情を動かさない。それだけで体調がよくないことがわかった。

「中国から送ってもらった肺がんの新薬が、どうも効果が出てきているみたいだよ」ある知人からそう聞いたことがあった。しかし病状はやはり一進一退に見えた。福地さんが肺がんと診断された頃、私には千葉にもう一人、肺がんで苦しんでいる知人がいた。私には彼もまた病状が一進一退に見え、ある時期、2人の様子から肺がんは死ななくてもいい病気になってきたのか、と思ったこともあった。が、私のもう一人の友人は、半年ほど前に亡くなっていた。その後を訪ねた雪の日の福地さんの様子を見て、よくなさそうだと思った。半身を起し枕元の引き出しから印鑑を出す動作も歯を食いしばるようにしてとった。私は厚労省に出す書類に判を押してもらおうと、「どうぞ大事にしてネ」とだけ言って早々に引き揚げた。

その後の福地さんの様子は、Zさんが電話で福地夫人から聞く「あまりよくないようだ」という知らせで聞いていたが、いよいよ死が近づいていたことは知らなかった。

■ 胃癌の手術跡を見せ合う

私が千葉県中国帰国者自立指導員として福地さんを担当、夫妻と初めて会ったのは2000年10月2日、市川市役所である。この日、福地さん夫妻は埼玉県所沢の中国帰国者定着促進センターから、千葉県の担当者に同道され、まず市役所で各種の手続きを済ませた上、国府台の県営住宅に入居したのだった。青森県から両親、弟妹たちと満州に渡り、父が入隊した後、敗戦の逃亡途中、母と弟妹をあいついで失う。運良く善良な養父母に育てられてハルピンの理工大学（現在の科学技術大学）を卒業、やがて学長、党書記まで登りつめた前半生のことは、本誌9号「忘れ難き歳月」に詳しい。

週に1、2回、3年間、彼の家や病院（国府台国立病院には夫人も心臓病のために診療を受けていた）で接した思いでは尽きない。忘れられない一つは私より7つ年下の彼もほぼ同じころ（12年前）ともに胃癌の手術を受け、お互いの手術跡を見せ合ったら、思わず2人で笑いあったほど、手術後に縫合した傷跡の場所も形も実によく似ていたことだった。そんな時に見せる、人懐っこい笑い顔が、今も鮮やかに目の前に現れる。

■ 蓋を覆わず

通夜の夜、同行した帰国者4人は、最寄の駅まで車で送ってもらった。しかし私は、来た時の荒涼とした夜の復路を、さまざまなことを考えながら歩いて帰った。翌日の告別式にも私は選んでこの道を歩いて行った。寒くて寂しい夜道とは違い藍天が心地よかった。だが告別の儀が進み、最後に棺の蓋を覆う時である。昨晚から先ほどまで、あれほど冷静に見えた夫人が、多くの花や遺品で覆われた夫の遺体にとりすがり、泣き喚いて蓋を覆わせなかったのだ。こんな光景を、私は78年の人生ではじめて見た。中国での社会的立場がどうであったにしろ、夫人としては異国へ来て生活保護を受けながら、言葉も通じない老後を耐えてきた。その夫に先立たれたのである。私は目の前に繰り広げられている情景

を、自分の気持ちの中で、自分でも驚くほど自然に受け入れていた。

私と同じ胃癌の手術跡を持つ7つ年下の福地さんは、私にはまだ訪れない次の癌のために先に逝ってしまった。私はまた冬晴れの田舎道をゆっくり、ひとり歩いてバス停に向かった。

その二

■ 映画「嗚呼…」で再会

「えッ、元気なんだ！」

思わずそう叫びそうになったのが映画『嗚呼 満蒙開拓団』の冒頭シーンにアップで出てきた中国帰国者・鈴木和子さんである。厚労省前、「団結」の鉢巻を締め、帰国者の仲間と両肩を組んでシュプレヒコールをあげている。このシーンは私が撮影にタッチする前、羽田監督がまだ中国ロケを決心する前に撮っておいた映像だから、私は映画が完成した後、初めて見たこの場面で、今はもうこの世にいない彼女と再会して、一瞬わが眼を疑ったのである。彼女は千葉市に住み、帰国者の役員として、私たち千葉で中国帰国者を支援する会にも時々顔を見せていたが、より多くは東京で開かれる帰国者・弁護団の会議に出ることが多かった。ただ、千葉で開く春節（旧正月）を祝う会などでは、よく蒙古族の扮装でリズムカルな踊りを見せたりする芸達者な女性だった。

しばらく姿を見せない理由を、私たちは東京の会議が忙しいからだろうと、勝手に想像していたある日、突然、訃報が舞い込んだ。それもこんなショッキングな詳報とともに。「体調を崩して入院したら、もう肺癌が末期だった。彼女はどうしても中国へ帰りたいと主治医に懇願したが、彼女の病状は、もうその願いを許せる限界をはるかに越えていた。意を決した彼女は無断で病院を抜け出し、タクシーを拾って成田空港へ急いだ。しかし成田では当然ながら搭乗させてもらえず、病院へUターンして息を引き取ったそうだ」

■ 命がけの搭乗へ

「日本では自分の必死の訴えが言葉の壁で通じない。中国の病院へ行けば、なんとか活路が見出せると思ったのか？」「すでに死を覚悟した上で、夫が眠る撫順へ行って死にたいと思ったのか？」など、さまざまな憶測が飛んだ。私たちの心を凍らせたのはその後である。「遺体を納めた柩は墓苑の遺体安置所に置かれたまま、2日後に荼毘に付されるそうだ」これを聞いて私たちは遺体が安置されている、墓苑の遺体安置書へ行った。そこは古い墓苑の一角にある葬儀社の一隅で、冷たいコンクリートに囲まれた安置所だった。国内に唯一の肉親である長男がいるはずだが、連絡が遅れていたのか、棺の中で彼女の、眼をつぶった大柄な顔だけが、そこにあった。

「生活保護の受給者が対象の弔い方がこれだそうだ」

と仲間が言う。台の上に載せられた棺の枕元に、1本の線香も蠟燭もない。それとわかれば用意してこれたのだが、すでに暗くなった墓地の一角のコンクリートの中で、私たちは黙って手を合わせるほかなかった。遺体はこの状態のまま翌々日の火葬まで安置された。

■ 寧波の香がゆらぐ

火葬の日は、たまたま私たち千葉県帰国者の会と支援者とが合同で催す「春節を祝う会」の日だった。火葬場からその準備を担当するスタッフが消えた後、残った4人で彼女の骨を拾った。その1人が故人の長男だった。白木の箱に入った鈴木さんは、「春節を祝う会」の会場に運ばれた。かつて蒙古族の扮装でタンバリンを鳴らし、軽快なステップを踏んだ鈴木さんを偲び、楽しい春節の会が演出された。

偲ぶ会を催したのは、それから1ヶ月ほど後だっただろうか。中国の撫順で眠る亡夫のもとへ帰ろうとして帰れず、無念の思いを抱きながら、あの地下壕のような冷たいコンクリートの箱の中で48時間も閉じ込められていた彼女の霊を慰めるために、私たちは「偲ぶ会」を行なった。彼女が元気な頃の遺影が飾られ、その前に焼香台を置いた。あれほど中国へ帰りたかった彼女のために、その昔、道元が修行したという中国・寧波の禅寺で買い求めた香を炊いた。

中国と日本で生き、同じ肺がんで、志なかばで旅立った2人の帰国者…私たちに託したものは何だったか、それをいつも自分の胸に問いかけるのでなければ、私たちの「支援」も「交流」も空虚になってしまう。

その三

温家宝総理も出演（寸劇）

ー千葉の『春節を祝う会』レポートー

毎年恒例の「帰国者と春節（旧正月）を祝う会」（千葉・中国帰国者支援交流の会主催）が今年は2月7日、千葉市美浜区の高洲コミュニティセンターで開かれた。開会前1時間、今年初めての企画で、千葉健生病院健康友の会の協力による「健康チェック・コーナー」が開設された。血圧、体脂肪検査… 続々つめかける帰国者たち。

「今年は何人集まるだろうか」、「帰国者は50人くらいは来て欲しい」、「もっと厳しく見たほうがいい。20人そこそこじゃないか」事前の読みが定まらず、最も悩みぬいたのは、弁当と飲み物を準備する担当チームだった。蓋を開けてみると大方の予想をすべて覆し、帰国者60名、支援者48名。弁当が足りなそうだと飛び出してゆく担当スタッフ。最後の補充買物から帰ると会場隅にへたり込んだほど。

「いつも歌と踊りではマンネリすぎる、新しい発想を！」と、昨年は有志による珍妙な京劇『霸王別姫』、今年と同じグループによる寸劇『よく帰ってきたね』（你们回家了！）。さきごろ帰国者の代表たちが訪中、温家宝総理を訪ねた場面の中国語劇だ。帰国者たちもテレビで見ているから、中国語のセリフもすんなり耳に入る。温総理や帰国者を演ずる支援者の熱演に爆笑が広がった。市原市から特別出演してくれた2人の高齢ゲストの手品と南京玉すだれにも大きな拍手が沸いた。新しい趣向の最後は福引。入場時に渡された番号

札で最後に発表された番号の寄贈品に帰国者の熱い視線がそそがれた。番号の発表役を、ゲストで参加してくれた当「方正友好交流の会」大類事務局長が演じてくれた。

その四

広がる波紋と「つらすぎる」と

—東京練馬で『嗚呼 満蒙開拓団』上映会—

■ 予期せぬ客

「中国帰国者家族とともに歩む練馬の会」の佐藤千代子さんから『嗚呼 満蒙開拓団』を上映するから話をするように、という連絡を受けたのは今年の夏だ。彼女とは中国における日本軍の性暴力を追及した班忠義さんの映画と著書『シーサンシーとその姉妹たち』などを通じて知り合った旧知の仲。この練馬の会が中国帰国者とともに、さまざまな活動に取り組んできた実績は、私が住む千葉でもよく知られている。この時も映画の上映のために、早くから必要な準備を、早くから周到に進めていることにあらためて驚いた。

さて当日（1月29日）、会場の（練馬区立）大泉学園ゆめりあホールへ行くと、受付、チラシを手渡す人、階段状ホールに案内する人、照明・音響の部屋につく人など、動いているスタッフが豊富で、しかも彼らの世代もキャリアも多様であることに驚いた。この日に先立って佐藤さんから、会いたいという人がいるから映画会が始まる30分ほど前に来るように、という連絡を受けていた。会場で紹介されたのは都立小山台高校の2人の先生だった。あの戦争末期、東京の商店街からも満蒙開拓団として満州に渡り、敗戦時、ソ連軍の攻撃に遭って集団自決に追い込まれた、その地元の高校の先生だった。定時制に通う生徒たちに、70年近くも前に地元の先輩たちが戦争とどう関わったのかを、さまざまな資料や証言で、ともに学ぼうというのである。『嗚呼 満蒙開拓団』はその開拓団（第13次興安東京荏原郷開拓団）が遭遇した悲劇の場所とは異なる地域の話だが、先生たちが準備している過程でこの映画会のことを知り、会場に来てくれたのだった。

それを知って私はすぐお2人に、ぜひ会っていただいたほうがいい方がいることを伝えた。この映画にも登場し、たまたま私が住む千葉市に住み、同じ地元の帰国者の支援活動にも関わっておられる、その開拓団の生存者・飯白栄助さんである。この話はその後間もなく実現し、生徒の前で生々しい証言をしてもらうことになった。

■ 帰国者の目には…

さて当日のゆめりあホールだが、私の役割は、映画が放映される前の30分ほどの時間に、司会の久慈美奈子さんの質問に答える、というスタイルのものだった。

- ① どういう経緯でこの映画に関わることになったのか。
- ② そもそもなぜ方正に関心を持つようになったのか。
- ③ いま、住んでいる千葉では、どういう活動をしているのか。

④ 戦争中は、どこで戦争とどう関わったのか。

などの話を中心になった。ほとんどは「方正友好交流の会」の会報9号で書いた『歴史証言の鮮度と賞味期限―「嗚呼 満蒙開拓団」―』の内容である。

この日、上映会は2回、行なわれ、1回目の入場人員が157名、2回目が61名（座席数176）。すでに予約をし、チケットを購入しておいたが、当日、都合ができて参加できなかった人たちのために、その後2月27日に再度、上映会を開催したほか、同じホールの別室で開いている日本語教室で25名の受講者に観てもらったそうである。日本語の理解が十分ではないこの時の参加者（帰国者）には、字幕のない日本語が難しかったようだ。また「見ている辛い」という感想や、「あんなもんじゃ語れない」という声もあったそうだし、最初から映画を見ようとしないう人もいたそうだ。ともに聞いて、あらためて襟を正すほかなかった。

その五

高校生と学ぶ満蒙開拓団

―ビデオを見、地元の体験者と語る―

3月17日夜、東京都立小山台高校（定時制過程）で満蒙開拓団の映像を見、関係者の話を聞こう、という授業があった。テーマは「東京の満蒙開拓団を知ろう―武蔵小山商店街と戦争」、前半は視聴覚教室が会場。生徒による司会進行で、まずNHKビデオ（昨年8月9日放送）「証言記録 市民たちの戦争 強いられた転業 東京開拓団―東京・武蔵小山―」（ナビゲーター：中居正広）を観賞。

■ 姉と生き残る

このあと全員、近くの小山台会館へ移動。まず「東京の満蒙開拓団を知る会」によるスライド上映と解説が行われ、続いて開拓団関係者による講演が行われた。講演はこの町の商店街で父親が乾物屋を営んでいた飯白栄助さんほか、戦争末期の昭和19年、商店街の決定に従って家族全員、旧満州興安南省（現在の吉林省）洮安県に入植した模様を話し始めた。敗戦によるソ連軍の侵攻で追い詰められ逃走中の開拓団が集団自決に追い込まれる。一部、死を免れた人たちの中に、飯白さんと姉さんもいた。それからの苦難の中で日本語さえ忘れてしまうほどの生き方。八路軍に入って朝鮮戦争にまで従った特異な体験は、郷土の後輩たちにどんな感興をもたらしたか、が大変興味深かった。

私にとって最も知りたかったのは、この若い高校生たちが、この65年前の先輩たちが生きて歴史の証言をどう受けとったのだろうか、ということだった。自分たちの現在の生活とは直接結びつかない「昭和史」としては、ほかの日本の高校生もまた、平均としてはそれほど関心を抱かないかもしれないが、地元の先輩たちがなめた「生と死」を、そして日本が犯した戦争を、どう受け取ったのだろうか、ということだった。

後日、この企画を担当された武藤正人先生から、生徒の感想をまとめたプリントを送っていただいた。ある生徒はこう書いている。

「満州開拓で満州に人が行ったのは授業でやったから知ってたけど、自分が通ってる高校の目の前にある武蔵小山商店街から沢山の人が満州に行ってることを知って驚いた。満州から逃げる時の話を聞いて、私は想像することもできませんでした。集団自決で親が自分の子を殺して、妻を、自分を。つかまれば男は違う場所に連れて行かれ殺される。私には考えられないし、ちゃんと逃げられた人たちは、そんな所から逃げのびた人達はすごいなと思った」

■ 「居眠り」と書く

いっぽう、「内容が難しくて、よくわからなかった」という感想もあり、これもまた率直な表現だと受け止めたし、「眠ってしまった」という答えにも、私は少しも失望などしなかった。会場にはその2時間前まで、工事現場で肉体労働をしていた様子に見える服装の生徒がいたし。昼の仕事の疲労で眠ってしまったとしても、それをそのまま事実としてアンケートに書くことをためらわないムードを、武藤先生や角田仁先生たちが日頃作っておられることを感じた。日中韓3国の若者たちが為政者の思惑で歴史から目を背ける授業を受けるとしたら、これほど周恩来総理の至言「前事を忘れず 後事の鏡と為す」に背くものはないからである。

(おくむら・まさお：方正友好交流の会 参与)